

女教師エリ

「教え子の言いなりになった新任美人教師」



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



1 時間目

保健室

カツツ、カツツ、と静かな教室の中に小気味良いリズムで
黒板にチョークがぶつかる音が響く。
教壇に立つその美しい女性は、英語の一文を書き終わると、
ゆるやかに振り返り、透き通るような声で言い放つ。

それじゃあ、この文章を
訳して貰おうかしら……
鈴木さん

はい

その女性に指名された女子生徒は
返事と共に立ち上がり、訳された文章を読み上げる。
俺はそんな光景をぼんやりと眺めていた。

教壇に立つこの女性は八神エリ先生。

今年教師になって、この学校に来たばかりの新任の英語教師だ。

整った顔立ちに凛とした雰囲気…と同時に、
大人の色香が嫌というほど漂っている。

一見、少しキツそうに見えて、意外と優しくて
親しみやすい所が、またポイントが高いんだよな…
ギャップ萌えの俺にはたまらなかった。

そして何よりも、あの抜群のスタイル…

下手なグラビアモデルよりもスタイルが良いんじゃないだろうか。

スーツの上からも見て取れる丰满な胸、くびれた腰、

むっちりした下半身…初めて見た時から、俺はもう完全に

八神先生に心を奪われてしまっていた。

es my school teacher money for a week.



やつぱり男とか居るのかなあ…


まあ、こんな美人を他の男が放っておくわけがないよな…

あんなエロい身体を好きに出来る男なんて、死ぬほど羨ましすぎる。
俺も、あのおっぱいを鷺掴みにして…身体中にむしゃぶりついて…

…はい
それじゃあ
次は塚本君

へっ!?!
ひやつ、ひゃい!!

そんな良からぬ事を考えていると、
突然先生に指名されてしまい、俺は慌てて立ち上がる。
焦っていたせいか思いっきり舌を噛んでしまい、
何やら変な声が出てしまった。



全く…塚本くんは
折角カッコいいのに、
ちよろつと間が抜けた所が
玉に瑕ねえ…

先生に茶化されてしまう俺の様子に、
再び教室内に小さく笑い声が漏れた。
冗談めかしながらも、先生から『カッコいい』という言葉
投げかけられ、俺の胸がドクン、と高鳴る。
そして少し呆れた様子で俺に苦笑する先生の表情が、
これまた物凄く大人っぽくてセクシーで…

ラブコメディの漫画などで、天使に胸のハートを
射られてしまう等というような比喻表現を良く見かけるが
今正に俺は天使にハートを射抜かれたような、
そんな状態に陥ってしまった。

はあ…とにかく
次の文章を読んで頂戴

え、えっと、
どこからでしたっけ…


95ページの二段目
もう、ちゃんと授業
聞いてなさいよ…

すいません…

俺が授業に集中できないのは、
先生が魅力的でエロすぎるからだろ…と
喉元まで出かかった言葉を、俺は必死に堪えた。

les my girl friend's
school teacher
money for a week

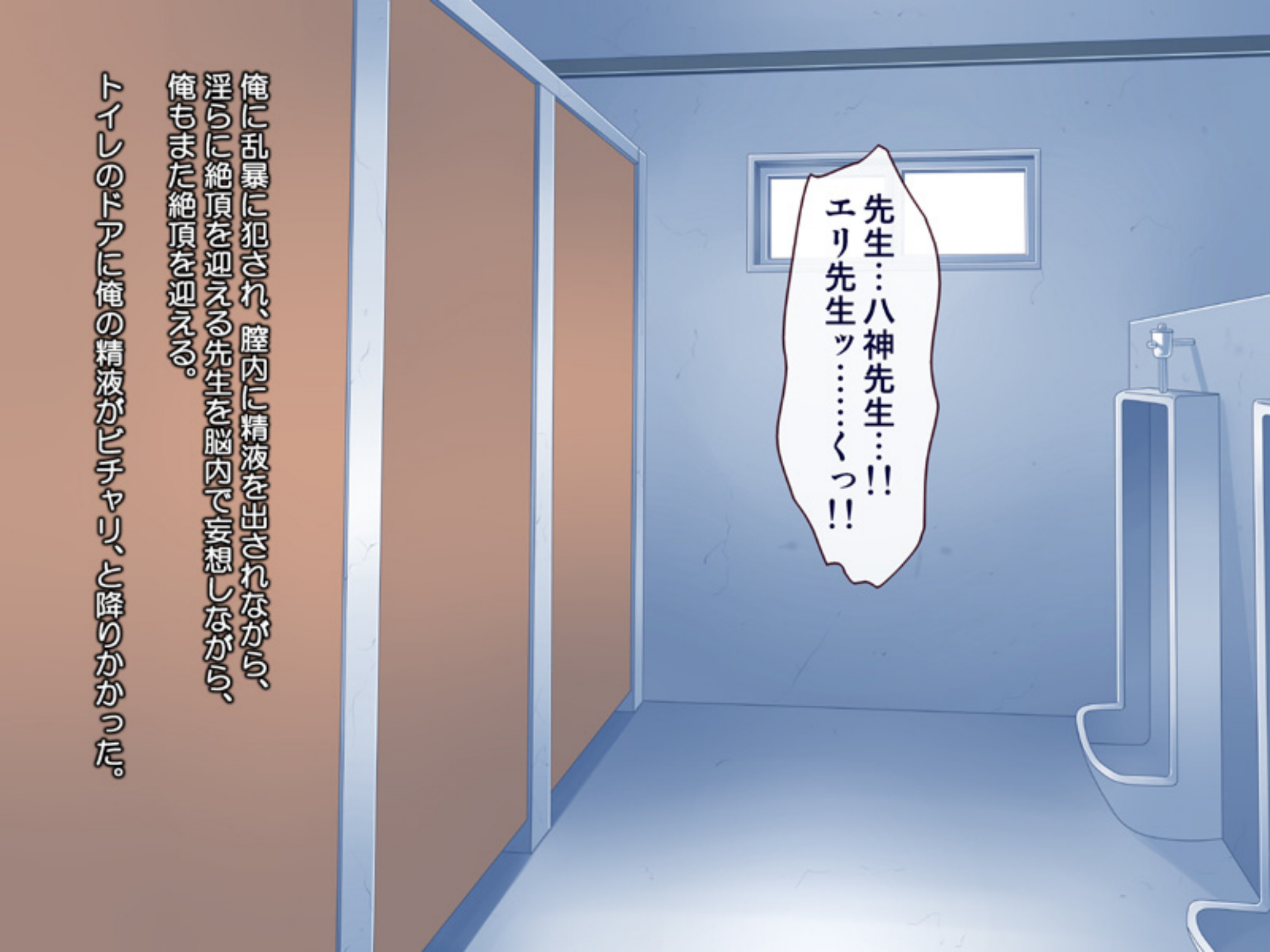


A blue public restroom with a urinal and a window. A speech bubble is floating in the air.

はあ……はあ……
先生……先生……っ

授業が終わって昼休みに入ると、
俺は隣の棟の使用者が殆どいない男子トイレに駆け込み
その個室の中の便座に座り、先生を想いながら
興奮した自分を慰める。

俺は脳内で先生を押し倒し、先生の服を破り捨て、
俺に弱々しく許しを乞ってくる先生を、
何度も何度も無理矢理犯した。



先生…八神先生…!!
エリ先生ッ……くっ!!

俺に乱暴に犯され、膣内に精液を出されながら、
淫らに絶頂を迎える先生を脳内で妄想しながら、
俺もまた絶頂を迎える。

トイレのドアに俺の精液がビチャリ、と降りかかった。

はあ……はあ……
はあ……クソッ……


脳内で先生を犯す妄想、それをオカズに
自らを慰める事によって訪れた一瞬の快樂と
数瞬の余韻の後にやってきたものは
絶望的な空虚感と、猛烈な自己嫌悪だった。

先生を想いながら自分を慰める行為は今まで
数え切れないほどしてきたが、その後に必ずやってくるのは
このどうしようもない空虚感。

ましてや、ついには学校でまでこんな事をしてしまい、
いつもより数倍増の強い自己嫌悪が襲ってくる。

はあ……
俺って……
最低だな……

俺はこの強い自己嫌悪と、それに伴う精神的な疲労感に囚われ
しばらく立ち上がる事も出来ず、昼休みの間中、
このトイレの個室の中で茫然と佇んでいた。



しかし昼休みも間もなく終了という時間になり、
何時までもトイレの中で佇んでいるというわけにもいかないので
俺は仕方なくトイレを出て教室へと向かう。

学校の廊下を見渡ししながら、先程の自慰行為は
学校でしてしまった事だというのが否応なく再認識され、
再び自己嫌悪の念が首をもたげてくる。

と同時に、八神先生への想いと欲情が抑えきれないほど
募って行ってしまうているのも、また自分ではどうしようもなく…
そんな二つの感情が同時に自身の中で渦巻き、
それに伴って何やら遣り切れない怒りが込み上げてきた。

クソッ！

ぶつけようのない怒りに任せ、俺は虚空に肩をぶつけるつもりで、
肩を怒らせ勢い良く一歩を踏み出す。

丁度その瞬間、廊下の角から人が現れ、虚空を切るはずだった
俺の肩がモロにその人にぶつかってしまった。

ズンズン！

きやあつ!?

えっ!?

俺からの半ば体当たりを食らってしまったその人は
後方へと跳ね飛ばされる。
ぶつかった時に上がった悲鳴と、体に当たった時の手応えから、
俺は即座に相手が華奢な女性だと認識した。

ヤベッ……！
大丈夫で……
あつ、八神先生!?

あ、あいたたた……
つ、塚本君……？

何と、俺が体当たりを食らわしてしまった相手は
八神先生だった。



俺は慌てて、床に崩れた先生に駆け寄る。

すいません先生！
俺ちよつと考え事してて…

びく

う、ううん…私も少し
余所見をしていたから…
い、いたたたっ…！

ズキッ

えっ？ あっ！
先生、どこか怪我を…？



ん…ちよつと足を…
捻ってしまったみたいね…
うっ…いたた…

先生が右の足首を
手で押さえながら、
苦痛に顔を歪める。

如何に故意では
なかったとはいえ、
先生に怪我をさせてしまった事に
俺の中で強い罪悪感が芽生えた。

先生、保健室に
行きましょう！
俺、肩を貸します
から！

ん…
ええ…

俺は先生の腕を掴んで
引き起こすと、そのまま
その腕を俺の肩にかけさせ
更に腰を掴んで
先生が立つのを支える。



(……)

思わぬ形で先生と密着する状態になってしまった。
服の上からでも伝わってくる
先生の大きくて柔らかい胸の感触、身体の肉付きの良さ。
更には先生から発せられる物凄く良い香りが俺を惑わせてくる。
夢にまで見た先生の温もり……
さっきトイレで又いたばかりだと言ったのに、
先生に対する欲情が再び一気に湧き起こってくる。

…塚本君？
どうかしたの？

あ、いやっ……
そ、それじゃ
行きますよう？

？
ええ……

先生に怪我を負わせておいて、俺は何を馬鹿な事を考えているんだ…とにかく先生を無事に保健室まで連れて行かなくては。俺は右足首を挫いてしまった先生を支えながら、湧き上がる欲情を抑えつつ保健室へと向かう。



しかし保健室に向かう途中、俺に無防備に体を預けてくる先生に、否応無しに興奮してしまう。

このまま先生と密着していたい…俺は先生の足を気遣うフリをしながら、わざとゆっくり保健室へ向かった。

保健室に着いたが、中には誰もいなかった。

先生と離れるのは名残惜しいが、とりあえず俺は先生をベッドに座らせる。

保健の先生は留守ですかね…
とりあえず冷却スプレーとかは無いのかな…

塚本君、もう昼休み終わってるわよ？
私の事はいいいから、教室に戻りなさい



いや！俺が先生を怪我させてしまったんですよ？
なのに先生を放っておくなんて出来ませんよ！

もう…
仕方がないわねえ…

はあ…

先生は苦笑しながら、俺が授業をサポート
怪我をした先生の面倒を見る事を許してくれる。

先生のごういう、優しくて少し甘らじいだが、
俺が先生に物凄く惹かれる理由のひとつでもあるんだ…

先生は授業は
ないんですか？

ええ……この時間はね

俺は先生と他愛のない会話を交わしながら棚の中を物色する。
先生はベッドに腰かけながら上着をひとつ脱ぎ、
少しくつろぐ様子を見せる。

上着を脱ぐその仕草までもが、物凄く優雅で艶やかに感じた。



ああ先生、湿布が有りました
貼りますよ

ありがとう
でも自分で貼るから…

いいから
俺にやらせて下さい

はあ…

はあ…
まったく…

先生は少し呆れた様子で溜息をつきながら、
捻った右足を俺に差し出している。

健康的でむっちりとした、とても美しい先生の脚を間近で眺め、
俺は思わずゴクリと喉を鳴らす。



えっと…

とりあえず患部を調べる為に、
俺はそっと先生の足首に触れる。

んっ…

ヒュー…

ふっ…

ジュン…

あ…
ここですか…

はっ…ん…
そこ…

痛みからなのだろうが、足首に触れると
先生は物凄く色っぽい声を漏らしている。

先生、俺の気持ちを知っていて、わざと誘惑しているのか……？
そんな訳ないのに、思わずそんな考えが脳裏をよぎってしまふ。

俺は沸き上がる欲情を抑えながら、先生の足首に
そっと湿布を貼った。

ふん……

ふん……

す……

ふん……
ふう……

……せ、先生
これでいいですか？

ん…ありがとう
ふふ…塚本君は優しいわね

優しいって…俺が先生を
怪我させてしまったんだから
これくらいするのは当然ですよ

ううん、優しいわよ…
塚本君は背も高くて格好良いし
女の子にもモテるんじゃないの？

えっ？いいいや、
そんな事は
ないですけど…

そうなの？
私が塚本君の同級生だったら
ほうっとかないけどなあ

な、なんだ？やたらと俺をベタ褒めしてる…
先生、もしかして本当に俺に「気があるのか…」？

先程から先生の身体と密着したり、先生が甘い声を漏らしてきたりと、何かと俺の欲情が掻き立てられる事が続いた上に

更にはこうして先生自身が俺に気があるかのような言葉を投げかけてきたため、俺の心臓がドクン、ドクン、と激しく鼓動し、頭に血が上っていく。

先生から何かの香水と先生自身の身体の匂いが入り交じった、物凄く良い香りが漂ってくる。

まるで俺を惹き付けて発情させるフェロモンのような、そんな先生の魅惑的な匂いが俺の頭をクラクラさせる。

よく見ると、先生の白く薄いブラウスの下に、ブラジャーが僅かに透けて見える様が、更に俺の欲情を掻き立てた。



先生は、そんな顔を赤くして恥ずかしそうに目を逸らす俺を眺めるような目で見ながら、少し悪戯っぽく微笑んでいる。

モ、モテると言ったら、先生の方こそモテるんじゃないですか？先生、優しいし、凄く美人だし…す、素敵な彼氏とか、居るんでしょう？

か、彼氏？
えっと…私は
そういうのは…

えっ？
先生、彼氏とか
居ないんですか？

う、うん…
まあ、ね…
…あはは…

あせ
あせ

先生…こんなに美人なのに、男が居ないのか…

その事実には俺の掻き立てられた欲情のより、
更に歓喜が上乘せられ、逆に理性が急速に萎んでいった。



はありあ…私にも塚本君みたいな、優しくて格好良い、
素敵な男性が居てくれたら良いんだけどねえ…

先生が苦笑しながら
独り言のように愚痴ったその言葉に、
俺の中で何かが弾け飛んだ。

じゃあ…俺と…
付き合いましようよ…
先生…

あはは…

え？

お、俺が先生の
彼氏になりますよ…!!

そう言いながら、俺は先生をベッドに押し倒した。

先生ッ!!

…んっ?

カッ

ビッ
ッ
ッ

先生！お、俺！俺も、
ずっと、ずっと先生の事が
好きだったんです！

えっ……えっ？
は……えっ……!?

先生は、いきなり俺に押し倒されて
愛の告白を受ける、という状況が飲み込めず、
目が点になっている。

先生！
好きです！
八神先生！

えっ、っ、塚本君!?
ちよっ……ちよっとな
落ち着き……んんっ!?

先生が何かを言いかけたが、
俺は言い終えるのを待たず、先生の唇を強引に塞いだ。

つかっ…んっ?
んんっ…!!

先生…ッ!!

俺は必死に俺から顔を逸らそうとする先生の顎に手をかけ、
力ずくで顔をこちらに向けさせる。
そして先生の唇に吸い付き、有無を言わさず
先生の口の中に舌をねじ入れた。

やっ…塚っ…
ん…ふ…!!

今まで先生に対して募らせていた想いが一気に溢れ出し、
もう自分で自分を止める事が出来なかった。
俺は唇を離すと、俺から逃れようとする先生にのしかかり、
自分のネクタイを外してそれで先生の両手を縛る。